

農業ってかっこいい!

しらかわ広域連携グリーン・ツーリズム協



滝田さんが社長を務める農業法人の畑でネギの植え付け体験=白河市表郷

風評被害と果敢に闘う

「しらかわ広域グリーン・ツーリズム協議会」は15年前に発足、県南地域に都会の人を招いて、田舎でしかできない農業体験をしてもらっている。東日本大震災以降は併せて、県産農産物の安全性を訴え、風評被害をなくそうと努力している。

体験から魅力知る

G・T通信のG・Tとは「グリーン・ツーリズム」の略。「グリーン・ツーリズム」とは、農山村に滞在し、農業漁業体験を楽しみ、地域の人たちと交流をする余暇活動。

G・T通信

同協議会は、滝田国男さん(62)を会長に県南地域の白河市、矢祭町、鮫川村などの農家12、13軒で結成している。このうち7軒が農家民泊を受け入れている。地道な活動が実つて、震災前の2



苗植えから2カ月後収穫されたネギ

炎天下、畑にネギ植え

滝田さんの会社の畑では、わたしたち記者5人はグリーン・ツーリズム体験でネギ植えをした。30度以上の炎天下の作業は、とても暑く汗が滴つた。ネギの扱いも難しく、折れないようにするのが難しかった。だが、土を掘つてネギを植えるのが楽しかった。グリーン・ツーリズムに来る人を楽しませる工夫は、「とにかく体験してもらう」と滝田さんは、「楽しい環境にいる人が多いので、初めて触る土いじりや農作業などができる」と語った。首都圏の人たちは、それでも「楽しい」という声が沢山来るという。これからも地域の活性化のめめやつていきたいと語っていた。



私たちが編集しました

石川柳青羽賀齋藤西山
つぐみ(白河二中)
龍玄(西郷一中)
太飛(本郷小)
怜奈(坂下南小)
璃優(矢吹小)

滝田さんの会社の畑では、わたしたち記者5人はグリーン・ツーリズム体験でネギ植えをした。30度以上の炎天下の作業は、とても暑く汗が滴つた。ネギの扱いも難しく、折れないようにするのが難しかった。だが、土を掘つてネギを植えるのが楽しかった。グリーン・ツーリズムに来る人を楽しませる工夫は、「とにかく体験してもらう」と滝田さんは、「楽しい環境にいる人が多いので、初めて触る土いじりや農作業などができる」と語った。首都圏の人たちは、それでも「楽しい」という声が沢山来るという。これからも地域の活性化のめめやつていきたいと語っていた。

009(平成21)年は5167人、直前の2010年でも4970人が、グリーン・ツーリズム体験に訪れた。しかし、拡散された放射性物質の影響を恐れ、『福島県の農地や農産物は危ない』とされ、同協議会のグリーン・ツーリズム体験者は、震災発生時の2011年はビ

ークの4分の1約1245人にまで落ち込んでしまった。2013年まで1000人台で推移、なかなか体験者数は回復しなかった。滝田さんは、都会で話を聞くと、震災原発事故のイメージは発生当初から一歩も出でていなかった。滝田さんは、ひとりでも多くの人に農作業を体験してもら

62歳。明るい性格で、仕事に對して熱い思いを抱いている人にみえた。滝田さんは、平成15年から、平成17年まで、表郷の最

後の村長を務めていた。今は、しらかわ広域グリーン・ツーリズム協議会の会長を務め、表郷ミニバスケットボール少や、白河地区交通安全協会などを

地域に貢献、滝田さん



熱い思いを語る滝田さん

い、福島県の農地や農産物の安全性を訴えている。この努力の末、滝田さんは、3300人にまで回復した。

震災から3か月後、グリーン・ツーリズムに訪れた都會の人たちが、白河の子供たちがマスクを着用していないことに驚いたそうだ。その理由を聞くと、震災時の報道で、福島県の子供たちがマスクをしている姿が強烈で、現在も着用している

交流者数は2017年に3300人にまで回復した。

そこで、滝田さんらグリーン・ツーリズムに携わる関係者は、都會の人には実際に福島の土に触ってみて、福島の農産物に触れてみて、いかに安全か、自身で確かめてほしいと訴えている。

最後に滝田さんは「農業は大きな変化の時代。ベンチャーエンターテイメント企業のように、若い人がどんどん起業してもらいたい。農業が憧れの職業になる日が来る」と農業の未来へ熱い思いを語った。

8年経った福島も知つて

土地改良区の仕事をしていだ。

滝田さんは、農業経営者の顔も持っている。牛丼チェーンの「吉野家フレーム福島」の専務として、現場の陣頭指揮に立つ。東日本の吉野家の具材のかなりは、滝田さんの法人が生産している。